

胆石症の自然経過：

全国合同胆石調査

The Natural History of Cholelithiasis: The National Cooperative Gallstone Study: *Thistle JL, Cleary PA, Lachin JM, et al* (Ann Intern Med 101: 171~175, 1984)

胆石症の自然経過についてはまだ十分解明されていない。全国合同胆石調査ではケノディオールの治療効果について placebo をコントロールとした二重盲検試験を行ったが、これにより胆石症の自然経過を24か月観察することができた。

この調査の主要部分は916例の患者から成り、うち305例に24か月 placebo を投与した。対象となる患者は21~79歳の男女で、標準体重の200%以下で、X線透過性の胆嚢

内結石を有し、調査開始前1か月は無症状の者とした。調査は1~4か月毎の問診と血液検査および9, 16, 24か月後に経口胆嚢造影などを行った。

305例を24か月観察したが、胆道系の疼痛の累積頻度は調査開始前12か月に症状のあった者では69%と高く、以前無症状であった者の31%と比べ、有意差を認めた。調査から逸脱した者が305例中57例生じたが、うち12例(4%)のみが胆嚢摘出術を必要とした。結石の大きさの変化については38%で0.5cm<sup>3</sup>以上の増大、18%で縮小を認めた。しかし、大きさの変化と胆汁の組成については明らかな相関を認めなかった。

この調査で胆道系の症状を以前認めた者は繰り返しやすいことが判明

した。患者は症状をきたしやすい群と無症状のまま経過する群の2群に分けられるようである。55歳以下では症状のみられた者が多かったが、症状が強いと手術を受けるので、無症状のまま経過する者が高齢になると残されていくのかもしれない。一方、初回から強い症状が表れる者がいることも事実であるが、検査所見などで推測することは困難であった。結石の数は多発のほうが単発より症状をきたしやすかった。

以上より、胆石患者は経過中症状をきたすことはあるが、手術を要することは少なく、結石溶解療法中の胆道系の重篤な合併症のリスクはほとんどないと結論している。

(関東通信病院消化器内科

伊藤慎芳 抄)